

平成28年産 一番茶の生産対策

鹿児島県茶生産協会
茶業指導研究会

昨年は、春先が異常高温や曇天、夏場は多雨と低温、秋から冬は台風襲来や異常高温など安定しない気象状況が続き、栽培管理面では非常に苦勞の多い年でした。

このような中で、茶業経営は収量の減少や茶価低下で収益は厳しい状況です。一方、肥料費等コスト低減への取り組みは限界にきています。更なるコスト低減は、収益を

更に悪化する負のスパイラルへと転じてしまいますので、経営の現状分析と効率的な経営戦略の樹立が重要です。

今年は、茶園管理や摘採、製造など基本技術を再確認し、「かごしま茶」の特徴である美味しい良質茶生産への取り組みを強化して経営安定に努めましょう。

◎良質茶生産対策

一番茶の基本は良質茶生産で、品質の良さが「かごしま茶」の強み。
品質（芽格、色沢、水色）を確保した上でいかに収量を確保するかが課題です。

1. 春の園揃え

春の園揃えは、摘採機の刃の高さに十分注意して慎重に行いましょう。

本年は、秋整枝後気温が高かったため、早生種や更新園で開葉が見られます。

過去には、平成23年秋の異常高温で開葉が見られ、対策がとられました。

目的：一般的には摘採の際、黄葉や木茎が混入しないよう整枝面を揃える。
冬芽が開葉した園では、切除後の下芽の早期成長を促す。



写真1 秋整枝後開葉した「ゆたかみどり」

時期：早場地帯	2月中～下旬
遅場地帯	3月上旬（芽の動きに注意して、遅れないように）
開葉園	切除後に腋部に再生芽を形成し、その再生芽が生育できる時期（通常より早めに 2月上旬までに）

春の園揃えの高さ

昨年の秋整枝面より切り下げない。

- ① 再萌芽等で冬芽が開葉している場合
秋整枝面より10mm前後上げて展開した冬芽だけを切り落とす。
- ② 出芽しているが開葉していない場合
秋整枝面より5mm程度上げて、出芽した芽を切らないようにする。
- ③ 萌芽、もしくは膨らんでいる場合
冬芽を切らないように秋整枝面と同じ高さで整枝する。

(過去の再萌芽事例 さえみどり 平成24年2月10日に秋整枝位置より10mm上げ整枝)



春整枝前

3月16日

3月26日

4月9日

2. 施肥, 防除

(1) 施肥 適期適量施肥で肥効を高める

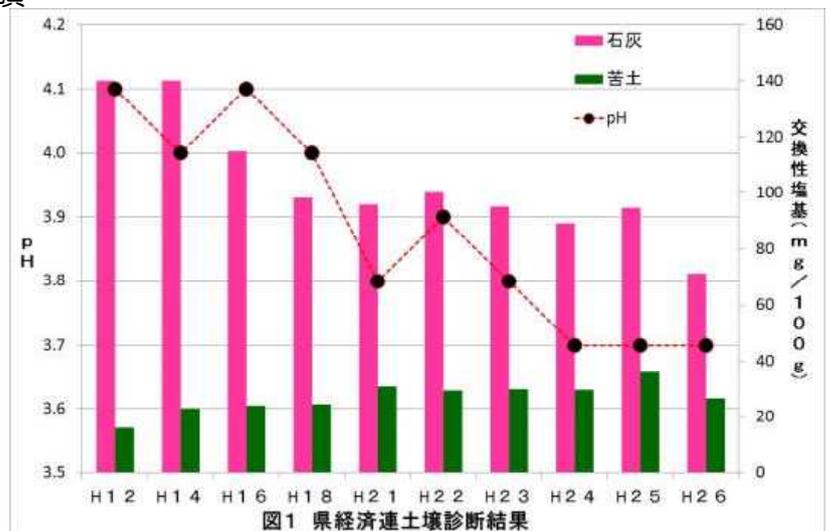
春肥は、施肥時期が遅れないように3回に分けて施肥する。

- ① 春肥 第一回目 1月下旬～2月上旬 第二回目 2月下旬～3月上旬
- ② 芽出し肥 摘採前25日頃

(夏から秋には土壤改良を実施しましょう)

県経済連土壤診断結果から近年、肥料費の削減により土壤環境が悪化している。石灰成分の減少とpHが低下し、土壤は酸性化しています(図1)。

土壤の酸性化は、根の伸長阻害、肥料成分の流亡促進、土壤微生物環境の劣悪化、さらには肥料利用率低下をもたらします。



(2) 防除

経営面積の拡大と労力不足、農薬費削減により防除がおろそかな状況が見られる。茶園を観察し、防除が必要なほ場を優先順位を付けて効率良く。
◎薬剤防除と深刈り等の耕種的防除を組み合わせましょう。

- ① 地区の防除暦を十分参考にして防除
- ② 春季ダニ防除 2月下～3月上旬
葉裏に薬液がかかるように、更に畝の南側など発生が多いので特に丁寧に
- ③ ハマキ天敵, ハマキコンNの活用
県全体で一昨年からチャハマキが増加傾向です。
南薩地区の一部でチャハマキのジアミド系薬剤(フェニックスフロアブル等)に対する感受性低下が見られるのでハマキ天敵やハマキコンNを活用しましょう。地区の発生予察に基づいて散布
- ④ クワシロカイガラムシ 一部で発生が多く、枝枯れ等の被害が見られます。
発生が多い園では一番茶後中切り更新をして徹底防除。

3. 防霜

霜害は収益低下に大きく影響。対策と見回りを確実に。
施設が老朽化している状況が見られますので、点検により正常な作動を。

- ① 防霜ファンは、温度設定やセンサー位置に注意する。深夜電力で契約している場合には、契約時間内の稼働に留意する。
- ② スプリンクラーは、水量の確保、目詰まり、ほ場外への流水や飛散防止に注意する。

4. 被覆・摘採 計画摘採で良質生葉生産と臨機応変な対応を。

被覆開始遅れによる摘採遅れが見られます。

近年、春先の気温変動が激しい。気象予報の把握と新芽生育観察を。

- ① 萌芽期を確認し、摘採計画をシミュレーション。(萌芽期から約1ヶ月)

生育日数例					
萌芽期	・・・1葉期	・・・2葉期	・・・3葉期	・・・4葉期	・・・5葉期
7日	6日	5日	4日	4日	

※H27年高温時の農開センター茶業部「やぶきた」の萌芽から摘採までの日数
 知覧19日(前年より10日短い) 有明21日(前年より7日短い)

- ② 一番茶芽の伸育状況を常に観察し、工場処理能力を考慮して計画摘採を。
- ③ 被覆は5～7日程度とし、摘採遅れにならないように。
 強風による葉傷み防止。気温が低いと被覆効果は得られません。
- ④ 摘採機の刈り刃の調整(刃研ぎ、すり合わせ)を摘採前に必ず実施
- ⑤ 摘採前に茶園の落ち葉、木枝等は必ず取り除いて摘採する
- ⑥ 摘採位置は、新芽が折れる位置で、硬葉化するにつれ摘採位置を上げる。
- ⑦ 摘採した生葉の確認を(切れ葉が少ない、切り口がきれい)

5. 生葉管理と荒茶製造上の注意点

荒茶品質と製造方法について情報交換を密にし、日々反省評価しましょう。

欠点等は早めに改善しましょう。

- ① 生葉管理3原則を守る。(水色の赤みは、葉傷みが原因。摘採葉の確認を)
 摘採した生葉は、早めに工場に運び適切な生葉管理をする。

- ア 生葉に傷を付けない。
- イ 生葉に熱を持たせない。
- ウ 生葉をしおらせない。

- ② 原料に適した蒸熱を行う。(蒸し度判定用カラスケールの活用を)

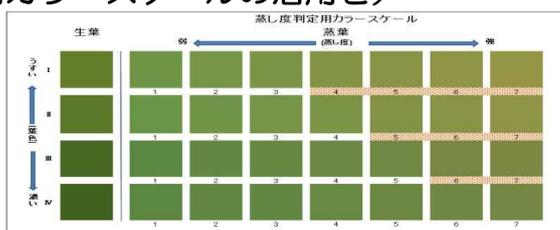
市場で色沢が黄色みや赤みが多く見られた。原料を見極めて、クロロフィル含量に適した蒸熱時間の設定を。

- ③ 気象変化に適した製造を行う。

(しとりのある製造を)

一番茶時期は、一般的には気温が低く、比較的天気も良いため空気がかなり乾燥します。市場に上場された荒茶に、かさついた硬い物があり、風量をうまく調整すれば良くなるものがあります。

気象情報や天気などに注意し、空気の状態に応じて風量を調整する。



- ④ 情報を活用する(市場へ出向き自分の目で品質確認を)

市場性に応じた特徴ある良質茶生産に対応するため、市況、市場情報を積極的に収集し、製造に生かす。

6. 欠点茶の撲滅(出荷前に製品のサンプル保管と審査を実施)

(1) 乾燥不足(乾燥状態を確認・・・青茎を折るとポキッと音をたてる)

- ① 荒茶の乾燥は確実に(含水率は4～5%)
- ② 乾燥不足の原因 温度不足 時間不足 投入量過多 風量過少 精揉の早出し

- ③ 熱風温度 80～90℃ 乾燥時間 20～25分（時間のチェックを）
- ④ 出物（頭等）は再乾燥して出荷する。

(2) 煙臭

- ① 茶期開始前のメンテナンス（長年使用による老朽化）と茶時期の清掃徹底。

7. クリーンな「かごしま茶」の生産へ、責任を持って取り組む。

クリーンなお茶は品質の1つであり、生産者・茶工場の信用にも影響します。

実践，確認，改善の品質管理体制を構築する。

「茶は食品，茶工場は食品加工場」

との強い認識を持ちましょう。

(1) 異物混入防止対策（チェック体制を確実に）

- ① 摘採前に必ず茶園面の落ち葉，雑草等を取り除く。
- ② 茶工場は常に整理・整頓を徹底し，食品加工場として位置づける。
- ③ 乾燥後の荒茶は必ず篩分機を通し，目視で異物を取り除いて出荷する。

(2) 降灰対策（鹿児島地方气象台やマスコミの情報をキャッチ）

- ① 製造前に必ず灰の付着がないことを確認する。
- ② 洗浄脱水機は，生葉投入量，水使用量などの基準を守り，確実に除灰する。

(3) 生産履歴記帳管理対策（摘採，製造前に履歴を確認）

- ① 生産履歴管理記帳は作業後速やかに，正確に記帳する。
（農薬名の確認，安全使用日数の厳守，希釈倍数など）
- ② 生産履歴開示は迅速に（開示請求から5日以内）

(4) 農薬の飛散防止（周囲への思いやりを）

農薬飛散によるトラブルが発生しています。

海外輸出や有機栽培が増加し，より一層の飛散防止に努める。

農薬散布の際は，散布状況を確認しながら周囲へ飛散しないようにする。

- ① 隣接耕作者と密接に連携し，散布時期やお互いの作物に共通の農薬を選定する。
- ② 風向，風速に十分注意した薬剤散布。
- ③ 飛散防止用の噴口や，飛散防止カバーの活用。
農薬散布後は，防除機やタンクなど必ず洗浄する。

8. チャトゲコナジラミ対策（トラップ調査を確実に）

平成24年に屋久島で発生し，平成27年12月までに県内12市町でトラップ等での発生が確認され，発生地域は拡大しつつあります。

登録農薬により，防除体系が確立されています。農薬費削減のためにも，地域一体となって，早期発見と拡散防止に努めましょう。

現在，天敵（シルベストリコバチ）を活用した防除技術を確立するため，天敵増殖をさつま町で実証中です。天敵の脱出痕が確認されており，今後に期待です。

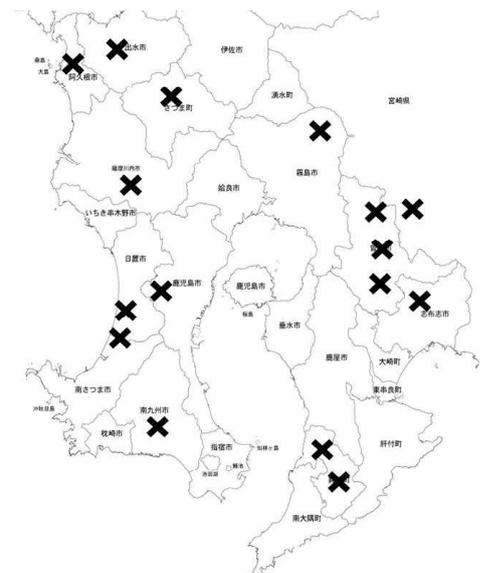


図2 チャトゲ発生状況